

燕石錄

五

庫 文 閣 内			
二	三	三	和
函		五	書
九	八	六	
架	冊	號	類

内 閣 文 庫		
番 號	和	35628
冊 數	8	(5)
函 號	213	135



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



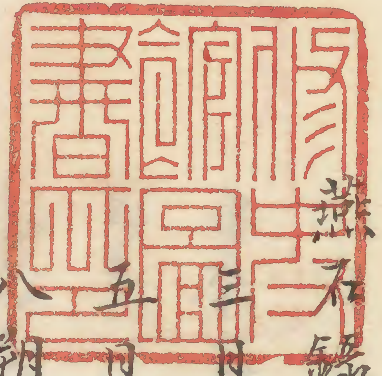
© Kodak, 2007 TM: Kodak



燕石錄

五

燕石錄



燕石錄卷之五

三日離

五日甲

八朝

十三夜賞月

髮置

新造

方巾道服

魁樞引

味芳

三日の雛



日本書紀曰今日めけわをいふ事といふ
あふらそひとていふ人形をて
あふらそひの事を源氏物語ふても見へる事い



いめ一より有る事なり又源氏より十の事ありぬ
人いひぬなほそひいふ事なるをいふ事なり
里うちもては事なり

近代書に曰敏達天皇二年にけりける雛元
のこれ總名なり鳥のふをえらる事なりゆゑ
せり少女のふをえらる事なり雛元とにのぬ

あまを世大裡離とて公卿の形を作らむわづ
ハ紙龍あり

源氏十人ありぬる人はいはいあそひはいいぬふ
物を

振るるる方恋しきその枝るる葵ひふらそひ
の調度

佳節摘要録友部 傳博曰日本紀崇神天皇十年大彦命

到於和珥坂上時有少女歌之曰彌磨紀異利寐胡
播耶飯廼餓烏鴉志齊務苦農殊末句志羅珥比賣
那素寐殊望

源氏為雪卷明石の形若きまゝの着の段々まゝの
ぎいふまゝのうわさゝとねほーソそくまをあげまど
き色まなりはきつういひあふあそひのこちて
ありーーい

又紅糸笑美白おとと君はうまいよまゝの給て

さーのそきあつうまういかにた〜ぬりあり
此時十歳許
や〜いりき〜あ〜い〜めて〜うあいきやうつこ

あ〜う〜う〜あむぬあま〜う〜て〜きおあ〜う〜
天のうぐーひ〜よろひなまなくあつらひて又
ちいさな屋敷は〜里あつめてまあ〜を前をきき

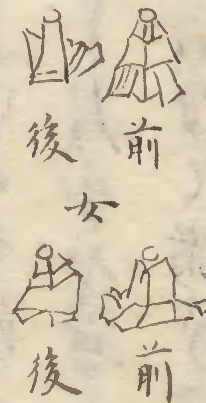
あそひもろけぬなりなやうふとそいぬまうおいらまを
と海ちけもあもふつと海ひまふぞとそいとくいと
お不いりけいといふとく人のおもきあひけの
ないまつくもせまづんらふまいつてなくい
作ぞとそ出ぬ^{日月元かせかり}たけいもあきまをくもまとい
ていひなかの中よ源氏のまといつてあひいそとゆま
いとせなむいあふとそいふとくあそびさ
ぞあ^十とくまりぬる人いひあふなりびいといふ
の紙

曰 龍まつまはま婦むつまといふまを
うつまなびたそものまといふといふい少彦名を
のま形をうつまといふたそものなりけは神は美氏の
病難をうつまといふた醫薬の術をうつまといふたは
縁もよりて難をいふた源氏をうつまといふた病難を
拂ふおなりとくまといふた今世も用ゆるまといふた龍
といふ^物天兒とも名付て諸子の災難をいふまといふた
せん川へちうすおまあり

骨董録 = 紅葉ノ賀ノ巻ヲ引テ云々今ノ代ノ女
ノ子常ノ遊ヒニ離サマ事^ナト、テ紙ニナヲ作

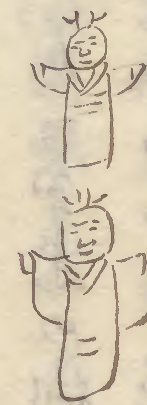
リ是ハ其彼ハ其ナト付テ人ミヨソエ人家睦シ
キ躰ヲ學ヒモテ遊フニツユ違ナルナリ今ノ弥
生ノ離遊ハ返リテ古キニ似ズ

伊勢ノ小米離宮



引廻シタル全体ハ
男女共ニカク如シ

八月朔姫瓜離宮



五日のうづと

日本書時記曰山城紀伊郡深志の里孫武家の
ミミ鎧を着し競馬ありけ神ハ延喜式といへ
志幡守の神社なり日本後紀ハ鴨別雷神の別也
と云々重なるより又云所の皇子もまた所ハ
早良親王伊豫親王井上内親王なり今日の
よりいふと云々光仁天皇の御宇天徳元年
ハ異國の凶賊責来しハ天皇弟二の
皇子ハ良親王に大將軍とて退治あり（ヨ）
宮中ありあはれあり新皇ハあひて五月五日

出陣しあふ神威ありてありて縁は大河吹来きて
大海波をひきあつてあふる星賊一戦をも及まずに
波はあふりてしるをわたりしるを里より時親王は出
るもふ軍勢のしるをさふひあふりしるや又都野の
童子今日葛浦のうづとた刀をもてあふりしるは
勢をふかゆなりけしは事むしる厚手紙に
人形もなり付たり板も胃の形もしる(或は旅
のまにけ馬を作り或木を領長刀のしるはづる
なりしる戸あふまはりしる近年ははは美巧を
あふりし木もしる人馬の形もまげも又しるに

采色をわしる或甲冑もさや鉦戟もしるせ幾
討の勢もさしるして戸外もしるはる馬をかぶる
しる又紙旗もしるの旗もしる長竿もしる是
を戸外もしるはるしるをのりしる或絹を用
るも何里或は長旗^旗を加えて是も吹わたるしる
報りもしるみりもて児童れ弄りしる
あふりしるしるしるしるしる事なり^{朱時}
雜記しるしる端午も都の人天師を畫て賣又土
しるしる師も作重文を以て競りしる蒜を以て巻に
門も又文を採結んで人の形に作重門戸のしる

しるすに毒氣をけくとしり
按ては乃家子孫傳乃
張俊と張師として其師

年山紀聞曰増鏡第五の香
後深草院いさこを
さうくあつて
五月五日所より
はるばるの花菜玉なるといふ
おほくさいなり

柳菴後曰後深草院信よりつうせあひて様い
なり
す
す
建長三年辛亥五月五日
百友書院を
す
増うみり何う書むとは
あをそて人形を作
り
し
て
の
そ
何
ひ
さ
なり
これ

端午の葛蒲習をこの建制なり

塩尻曰端午の旗を立てる
鑑をつらぬく
吾を
さ
つ
ら
く
そ
地下の戯ありと
は
は
は
は
を
考
ふ
是
利
家
兵
馬
の
權
を
と
り
て
日
五
月
五
日
治
て
習
兵
の
基
業
と
し
て
あ
の
形
勢
を
作
り
角
を
吹
鼓
を
鳴
ら
し
五
曲
五
色
あ
ら
の
旗
を
揚
て
互
に
あ
は
れ
ま
さ
の
用
を
な
し
挑
合
て
後
凱
旋
の
所
と
し
て
な
り
て
笑
を
そ
も
幸
あ
ら
い
て
武
家
の
儀
例
と
せ
り
吾
子
知
ら
し
て
妄
ま
い
ふ
つ
つ
に
と
云
実
に
事
が
な
り
と
し
て
説
を
な
し
後
人
を
何
々
と
し
て
以
事
物
に
付
て
先
達
の
言
を
後
に
理
を
ゆ
ら
り
と
し
て
は
な
り
と
し
て

る方法なり。下関を經て人のたゞせむを思むる
愚なり。是なる人のたゞせむを思むる。愚なり。若
くもいふ。たゞせむを思むる。たゞせむを思むる。自ら戒め
人もあらず。なり。

蒼梧隨筆曰五月五日男兒アル家々ニテハ幟兜
鍔ヲ門庭ニ飾リ建ル事関東ノ風俗ナリ夫ヨリ
國々へ及テ大凡其風俗ノ至ラサル所モナキカ
如シ京師ニテハ公家々々ハ幟立ルコトモナシ
市中町家ニテモ此日本偶ヲカサリ薙刀ノ類ヲ
ハ飾レトモ未タ幟建ル事ハナシ去レモ武家ノ

人々ハ貴賤共ニ其營ニカサルコト東武ノコト
シ此事幾頃ヨリ始レリト云事慥ニ考ヘ出サレ
トモ恐ラクハ幟建ル事ハ神君御洛世以後ノ事
ニモアラシカ木偶ヲ飾リ薙刀薙刀ナト飾ル
ハ古クヨリノ故モアルニヤ中畧

新田家ハ一ツ引兩足利家ハ二ツ引兩ト云事ニ
モ心ヲ寄セス剃ヘ太トク細ク二條ニナシテ子
持筋ナト云名目ヲモ付タルヨリ様々ノ曲説モ
出来タルモノナリ若ノミナラス近世ハ中下ノ
士庶ノ族ハ其二引兩ノ下ヘ己方家ノ文ト又外

家ノ文トヲ交ヘ押ス事尋常ノ習俗トナリタリ
武家ノ男兒ノ祝事ニ其軍旗ヲ學ヒ飾ランニハ
如何ニモ我家ノ紋ヲ押テコソ祝スヘキニ外舅
家ノ紋ヲ交ヘ押スヲ甚謂レナキコトナリ是ヲ
按ニ中下ノ士庶ノ旗ハ男兒ヲ儲ケタル時多ク
ハ其外舅方ヨリ調シオクル幟ナルニヨテ上ニ
例ノ子持筋ヲ畫キツノ下ニ父母ノ紋ト稱シテ
並ヘ押スヲナリ故ニ斯様ノ事ハ高貴ノ家ニハ
ナキヲニテ其家ノ紋ナルニ明カナリ又下リテ
農工商ノ家モ男兒ナレハ最メシク武家ニ真似

テ毎戸幟ヲ建アマツサヘ鎗薙刀ヲモ飾ルニ至
レリ聊捧腹スルニ堪タルヲナリ去レ市巾ニ
テ建ル幟ニハ己々カ家ノ紋ヲ押テ又其下ニ様
々ノ目出度モノ鶴亀松竹ノ如キ又ハ武者画ノ
類ヲ画ク事ハセメテハ武士ト町家ノ分テ目タ
ルノ一條ナルヘシ

那波守之老圃堂集詩端午國俗此日門建旌旗門
首旌旗紅白列檐牙菖艾短長垂世間萬事見兒戲
風化所移人可知

八朝

桃花葉葉曰八朝事正應二年御記曰あふ家々の
いふとよけたのむ人も物もさけとてさうまて
るそちにもおろくつす里けんとかほぬ就はさ其
し後深多俊法代建長の比おひし里のあつまる
や宗多親王の時代たつて

康富記曰嘉吉二年八月一日千秋之節萬幸晝過
程參清外史之文亭依遲參先有使例式賞翫蕙粥
有一盃之後退出了外史被語云今日食蕙粥之事
未見出處若被見及歟予十節記之中不見此粥之

事之由返答了

雜話筆記曰 大神君關東御入國ト云ハ天正十
八庚寅年八月朔日ナリ故ニ五節ニ同ク殿中ノ
御祝ノ規式嚴重ナリ

夏山雜談曰八朔ニ禁中一大樹ヨリ御馬御太刀
ヲ進セラル此時ノ御太刀ハ禁裏ノ御物ヲ借用
ヒラル其次ノ日御太刀代トシテ鳥目ヲ納ラル
、也是又室町家ノ時ヨリノ事ナリト公物ノ御
太刀ヲ借用ヒラル、トモ古例ニテ秘藏ノナ
リトイヘリ

年山記聞曰弁内侍日記後深子寛治元年八月

一日中宮の替方より替りて替りてあるきその世の

つねなるにうけうけりてうむ

ふふきりうき物のなをうけたのめをゆきふひとそ

揃きまけゆけのうきうき物とたのめむふのき

とまりに合せうきうきをたのむれきといふやは

ふふきりうき

梅柳編より利き民の心ひろく物やみの葉な
きききききき八月一日遇ふと人とのききききき
きききききききききききききききききききき

大外記中原家事日記文安五年八月一日乙卯
勢文子奉福八朝禮事何比より有る事歟之由
尋申所爰後多相院末方より出来歟但不得所見
隨所詮先代より所^ほ初歟鎌倉より事起之由
所語傳也清家^ほ事見之近事如此之由注
付^ほ又今日尾花^ほ之^ほ其由未何^ほ之^ほ
之由今聞之給未見及未知其^ほ細候由^ほ
海人藻芥云八月朔日山花粥内裏仙洞以下合用
給良菜云々彼粥^ほ粥法^ほ粥入^ほ合也

以上山記聞

草廬漫錄曰將軍家より於て多時八朝の禮事
始^ほ之^ほ其^ほ後^ほの規式^ほ厳重也皇天正十八年北
條家滅亡一聞八州河川家の佐領國より其年
八月朔日東武へ^ほ入國^ほに^ほ入^ほ也因て八朝
ハ五^ほなり^ほも^ほ取^ほけ^ほき^ほ一^ほと^ほなり^ほ

九月十三夜賞月

東見記曰九月十三夜翫月ノ事延喜時始ルト云
事建仁寺ノ三益和尚十三夜詩ノ序ニ書之又北
野天神縁起ニモ去年今夜侍清凉ト云句モ流罪
ノ前ノ年ノ事九月十三夜ト見ヘタリ

歳時記曰九月十三日夕月を差さる事 中秋の
 こゝろ 吉田義好より後日々八月十四日、九月十三日ハ
 婁宿なりけり清原なる故に月を照ふ良夜と云と
 見えたる里あるまじきもけ後地の出交を志すに 北年
 宿も除て考へる里又月々大小阿まをらるへり故に

とてふ人なりたるは凡秋を月を妻する時なり中
秋をさるるも月を妻するは佳なりとせり我國
又九月十三夜も用て月を妻するは八月より
既に十五夜の月を妻すぬまの月望の月を
といふ又天道を満ちるは様を取てこれ日を
用ひたる一は宵の月を既にさるるに
定むたる斯く見えにたまふ十三夜の月を
妻す詩をさるる河原又茶屋相寧府より作里
給へる芳蔭都を白雲路と題句の河原律詩を
一説に九月十三夜の作とてさるるも芳蔭集

とて九月十三夜の作とてさるるも芳蔭集
河原よりさるる河原は又茶屋相寧府より作里
給へる芳蔭都を白雲路と題句の河原律詩を
一説に九月十三夜の作とてさるるも芳蔭集
九月十三夜の月を妻するは佳なりとせり我國
又九月十三夜も用て月を妻するは八月より
既に十五夜の月を妻すぬまの月望の月を
といふ又天道を満ちるは様を取てこれ日を
用ひたる一は宵の月を既にさるるに
定むたる斯く見えにたまふ十三夜の月を
妻す詩をさるる河原又茶屋相寧府より作里
給へる芳蔭都を白雲路と題句の河原律詩を
一説に九月十三夜の作とてさるるも芳蔭集

冬月

千載集に詩人不知

秋月あに心あけられしうき世の一夜の月もあらず

風集に左京右京の輔

ふれの月夜のまじりたる光をまじりたる影

藤原忠通 号は性直 九月十三夜 既月 詩子

閑窓寂く月相憶は属如秋望色 禁酒家苦唯凄

雪 訪 蔣家舊徑踏露尋十三夜 影勝於古跡 百年

光石若今猶倚窗 好田有月 月夜 僊千載

秉燭譚曰九月十三夜ニ中秋ト同ク月ヲ賞スル

トソノ所謂ヲツマヒラカニセス徒然草ニ中秋

ト同ク異宿ナリト云抄物ニ吉備公ノ傳ナト云

説アレ氏タシカナラス五雜俎ニ九月十三日晴

釘靴桂断繩ト云フアリコノ日ハルレハ久シク

晴ルト云フナリ釘靴ハ今京師ニテ鄙人ノハク

ツナヌキト云モノナリ天氣ヨキニ因テ壁ニカ

ケヲクトナリ先人大府清公コノ夕月ノ會ニ詩

ヲ乞玉フニヨリテコノ事ヲ用ユ然レ氏明ノ詩

田家ノ雜石晴雨ヲシルスノ諺語ニテサシテ明

月ノ事ニアツカラス前年山本道春ト云浪士ア

リ彰考館ヨリ寫シ来ル由ニテ中右記ノ内抄出
メ示サル長承四年九月十三日今夜雲淨月明是
寛平法皇今夜明月無雙之由被仰出云々仍我朝
以九月十三夜為明月之夜也トコノ文ニテソノ
始リ明ナリサノミフカキ義理アルニ非ス一時
天子ノ歡賞ニヨリテ後來永ク例トナリテ佳期
トスルナルヘシ又頓阿ノ草庵集ヲミレハ
アキラケキ御代ノ昔ノ秋ヨリヤ月モ名ニオフ今夜ナルラン
トコノ歌ハ寛平ノ事ヲ證トスルヤウニキコユ
兼好ト同時ノ人ナレトモ互ニ相通セサルニヤ

重テ好事ノ人ニ尋ヌヘシ或人又云ク平忠度百
首ノ内ニ

オシトイヘト秋ノ半ヅ月ハナラ今夜モアリトオモヒナサレキ

トコノ歌サノミ十三夜ノハシマリノコニハア
ツカラサル^ル氏オモムキアルニヨリテツイデニ
コレヲシルシヲク

常盤日記曰九月十三夜月ノ宴れ^るめ先帝と
^るあ^るつ^るあ^るひ^る物^るあ^るき^るど^るも^るさ
だ^るあ^るで^るう^るけ^るに^る中^る御^る門^る右^る付^る記^るを^る引^るて
寛平上皇^{字多}の^るま^るそ^る免^るの^るま^る雅^る遊^るり^るあ^るめ^る

永く傳へつけし出来事とあるものなりといふ説の
とやあるものなりといふに惟態先年京の伏見
から福島の祠宮非蔵人羽倉掾津名ハ信名一文
のつひには延永の事開合せある事一は中こ
せし十三夜當月の満ちて起る天曆村上の
七年九月十三夜ちめて月の宴を行ひしに
遺例とある事一也但し其宴いさや八月十五夜
の遊遊も後きえにふひあつた也きし八月十
五ハ先帝の國忌なりとある事一ハ備し後
て九月其遊を行ひしにふあつたに九月とて

十年ハ其日次も忌忌とあれはとて諸十三夜
うたえては月の宴とある事一行ひしに
昔年韶光卿の事侍中とある事一明の事
一めいさし具は事つある事一告げはる事一也然今こ
ききわめし事とて能くの説説何の事とて
とめえし事とて能くの説説何の事とて
らにといふ事とて能くの説説何の事とて
かうんといふ事とて能くの説説何の事とて
つきあふ事とて能くの説説何の事とて
考るに朱雀天皇の事とて能くの説説何の事とて

曆六年八月十五日と云ふは、ハのヤリヤリも子

細るはらん

雞林唱和集菊叢

藤原子績

問中秋賞月自古而然九月

十三夜賞月之咏間見中華詩集貴邦亦當此夜賞

清光乎李東郭答我國例於八月十五夜賞月九月

十三夜不為佳節寧有賞月取樂之事乎

集本云九月

平維章不問語曰九月十三夜の月を賞するは

家より始といふは誤りなり室匠文庫より出

る者家後草に九月十五夜の詩あり五の字の誤

りて之を作る者あり云ふこともし誤りなり

ふと云て然るの作ふは誤りと云ふ事

中の誤門太夫殿中衣記といふ事

なり

西遊手録小宅生順曰我邦古未愛九月十三夜月

如中秋未知貴國亦有之否我醍醐帝之代有管丞

相道真依譜左遷宰府逢九月十三夜月有詩曰昔

被榮華簪組縛今為貶謫草萊囚月光如鏡無明罪

風氣如刀不破愁隨見隨聞皆慘慄此秋獨作我身

秋此詩賞月權輿也舜水曰中國惟中秋無九月十

三事菊月惟重九登高十三之月則不賞

家忠日記

天正十一年十一月

六盤署

諸禮部國集曰男女と毛子之氣の十一月十五日

う辰をふひね就るあーうづさゝの

ハ綿苧九の一五申と七所
上にも位分あぐ

あふう、水引く結ひ多う、その身を

ハ子のひふいろうふくろそし先

氏神次子彦部一乳母いづちて系より久里

韮煮吸物或ハ赤飯酒飯酒も出てうちを祝ふ

のあり女子はときづき初め

諸禮事記曰髪置男女ともに之來の十一月十五日
ももつ——是を親むたのもつ——親のうらより廣き
梯もつ——ゆひお引もつ——み一把茶七筋以上
七^種種をもつて出さへ——
児も吉ふ——むらや髪置の親より男子は左
の鬘も三もみ右の鬘も三もみ中をも三もみ
もみみ叔も一把のつて顔よりうらふらふか
き其下のつ——も七筋をも入るももつて福をも
もゆひも男結ひはあふあは結も次を水引二筋
て女結ひもももあふも九筋の祝念もあふ

女子あふ女親も水引——女子は右れ鬘よりもも
つ——も外あふ男ももあふ——

新造

家忠日記曰天正八年二月十七日
おきり新造孫若濃一

園より引こして濱相殿を築つる所

又同市、新造孫送る、屋敷おけもさきとて越

又同十二年八月三日、深溝新造孫をふつる所、

増井正宗寺舊記曰新造上法名昌隆者一峰之御
時也

又曰新造上ハ那須越後守資世ノ孫女ニテ御座
也

又曰曜岳之御時ノ御新造ハ町田ノ女也

鈴木重宣嘗テ話ス新造ノ妾ト云エルヲ應仁記
ニアリト重テ檢スヘシ

多聞院日記曰天正七年十一月廿日二條殿御
新造ニ五ノ宮ヲ猶子ニシ奉テ居被申來廿二日
ニ御渡云々
西國太平記卷一曰大内義隆卿新造ノ叔女ヲ京
都ヨリ迎ヘテ

方中通服

桑名吉村又右衛門隠居ヨリ所執一通差越方中
道服ヲ製時問合中吳ノ振彩越中、是等先年分
心至江戸屋敷惣意之もの振彩立寄第一段合
一唐着も有之由江後物故、
極ニ其様々老拙は惣文ノ儀乃承法内ノ法官合
中吳ノ振彩之もの、
法家より被進其もの有之裁縫も振彩ノ被受是
服ノ儀お分り有之由、
裁縫ノ被仰下
被仰り不善致す、
以上分所指示以下後

獨虎抄より布、方巾も老拙心得、信度法中、
百可裁成、八圓面、法惠、江戸、度、多、裁、上、
多、多、裁、上、

附記 某名屠、吉村、翠、并、分、法、何、合、書、

包紙 市道、集、法、問、合、書、 一通

義公、御、菟、裳、後、方、巾、を、被、着、有、由、今、以、法、中、巾、
法、中、巾、中、九、有、之、裁、二、翠、軒、先、生、も、巾、中、巾、
右、主、舜、水、先、生、携、来、之、形、二、裁、又、夫、法、中、集、括、後、
左、主、舜、水、二、裁、法、中、裁、縫、色、目、地、合、迄、最、知、法、度、何、
卒、而、法、中、一、枚、法、中、二、裁、貫、法、中、度、法、中、子、
一、巾、中、巾、隱、退、之、人、在、初、之、印、布、衣、上、二、仁、八、麻、

長袴之上、一十、德道、服、二、法、中、巾、
斗、目、小、刀、二、裁、又、服、細、小、袖、服、差、也、用、以、裁、
如何、素、袍、着、之、衣、八、麻、中、袴、之、上、一、圓、法、中、子、
号、八、服、細、小、袖、服、差、二、裁、士、人、之、長、袴、中、袴、二、准、
法、中、如何、

一道、服、之、色、目、不、定、由、二、法、中、二、裁、多、分、八、何、色、被、用、
法、中、巾、多、裁、裁、縫、二、

義、公、之、法、中、集、二、裁、普、通、之、標、紳、家、二、法、中、巾、
法、中、巾、一、号、主、舜、水、先、生、之、也、
法、中、集、括、後、
裁、

一 普通之者

一方中燕尾規式五本不用修先年用者
九以尺爲六折爲少の事、此證也

一 内々々彼所^下少故自是也當時之行見及中多受
 意内々々々得法意也表向中有一人役人亦一也
 不申達然而及法各終乎故願中一屬法也
 法智、左様法心得可致下、

一差別無常

中表の少風候相衰一何中も古之形ハ昔の座
能毎度新風輕水而も汗顔之而も了風坐能

法用ひ共にお成可なり。一、折角被仰下程故付
 札あり及法尺有。法院後法火年一以下、先年肥
 田和家守隠居号柏堂然人乃腹。〇京海一問
 今、答お成。一、富家、法用ひ然、〇富家、可
 想。法尺有。

道服とてハ地ハ緞子ちりめんあとの影あり裳
き付て袴も着て表は着て烏帽子も着て燕
尾の服あり但し其ハ仙乃の服といふあり俗家
より出づるなり

道服とてハ地ハ緞子ちりめんあとの影あり裳
き付て袴も着て表は着て烏帽子も着て燕
尾の服あり但し其ハ仙乃の服といふあり俗家
より出づるなり

右白石ノ紺珠ニ有

西山公ノ時ハ方巾ハ藤田柳軒ノ物彼家ニアリ
道服ハ谷甲斐翁ノ物彼家ニアリ蘆川散木此二
家ニ假リテ制シタリト云

右翠軒筆記ニアリ

方巾ハ先年より紙形有る者何れハ方巾道

服の圓も有之小方中朱氏法中先達而白川
老侯一西山公之舊物之道服之富めて新製之
相成り違ひ有之形も有之然得たり新製之
右之類明服之圓祝也ハ當時之中山教富中朱氏
然由大内在世之時より相傳はり其方中
其外國出来物中其文也後一向沙汰不承其
急道竹拜領之華人其服も其節初世法仕為富中
其文也後ハ右様穿繫も其之由より其節初世
紙形ハ蘆川之木二家之圓より富と先人有
之其交搜索たり其方不其見たり

八月十二日

甚右郎

次郎右衛門様

一蓬窓日録曰方巾圓領明服也

一南ア正卿ハ其ハ其小細戸の方兼り合せり

義公召き道服ハ其方巾也其方巾ハ其方巾

同人より山國其ハ其方巾ハ其方巾ハ其方巾

其ハ其方巾ハ其方巾ハ其方巾ハ其方巾

一閑事其ハ其方巾ハ其方巾ハ其方巾

其方巾ハ其方巾ハ其方巾ハ其方巾

人用ゆべきなり其方巾ハ其方巾

思
鬼

方巾の事をきけり

是方巾一項故散木居士蘆川正元之舊物也例
本藩致仕卿大夫士非官裁則不能服矣明和
己丑之冬正元致仕^乞用此為象命允之嘗聞
先臣柳軒居士藤田貞固綠翁居士三水之言第
此二人拜恩於前代而今復法服儼然所以稱
榮也嗣子德本喪畢因俾工人新製一疋十襲珍
藏傳之永世而不忘也

安永二年癸巳夏五月

菊池方謹記

方軒ハ柳軒ノ品ニヨリ方服ハ綠翁ノ品ヲ

模セシヨシノ書付アリ藤田氏ニ問ヒシ其
品今アルナシナリ

法月所方の定任^乞方^乞一問一答

一 慶曆九卯五月諸法禮^乞印

布衣以上隱居

慶斗月乃彼才袴

素襖着^格同所

慶斗月乃彼才袴

素襖着^格同所

彼道服^乞十修計

一 天明二寅二月

布衣以上隱居

乃彼才袴

素襖以上同所

右同所

一文化十年正月年以正月見大役布衣素襖着之
節

三日 布衣望隱托

道服長袴

素襖以上同前

乃按才袴

素襖以下同前

乃按乳十指汗

小廊瑞龍役人

十指汗

行水金鑑引今水學曰明初里編老人得參議民間
利害及政事得失太祖謂之方巾御史每里一人專
以教民勸俗如漢三老故事
コレニテモ處士

ノ服スルモノト知ルヘシ

方巾の巾住者七之元一語一は月附ノ方者三本縁高
の形形月見^ホも用ゝる肥田伯道の時月見の
時用たるもの形ハありきとも是も用ひぬる
太田系鬼笑高一海口の時に月付より月目見高
く時より何くとも方巾ハ禮服より何く高ハ月目
見高ハ不^ホ成^ホ高^ホの也平日ハ高^ホ中^ホの^ホ一も
着用より出^ホき^ホの也

甲陽軍鑑卷十^ホ以後皮制の道服袖廣帷子^ホも
牛と馬と兩方^ホの中^ホに草履^ホを^ホく^ホく^ホ付^ホて^ホあり^ホ

くつし ちふそけり 里後ハ皮をき 何と能馬と騎
ても右舁てくきる 道服帷のうき ちふそけり
定り ち福降果す也

按ニコレニヨルトキハ道服ハ穢多皮ハキナ

トモ着用スルモノト見一タリ

本因ニ...

...

...

...

...

吉野英臣付札

一方玉中燕尾中圓改進上装

一布衣以上道服素襖十徳相用、餘之具ハ西

忌トモ時ニ應一用也

一造製圓改進上装

遺製も用、得方多分主普通之品用或主高倉

家古製相用也

色目主縹袴皮海老木賊之類亦主紫主外任表

主紅紫主也

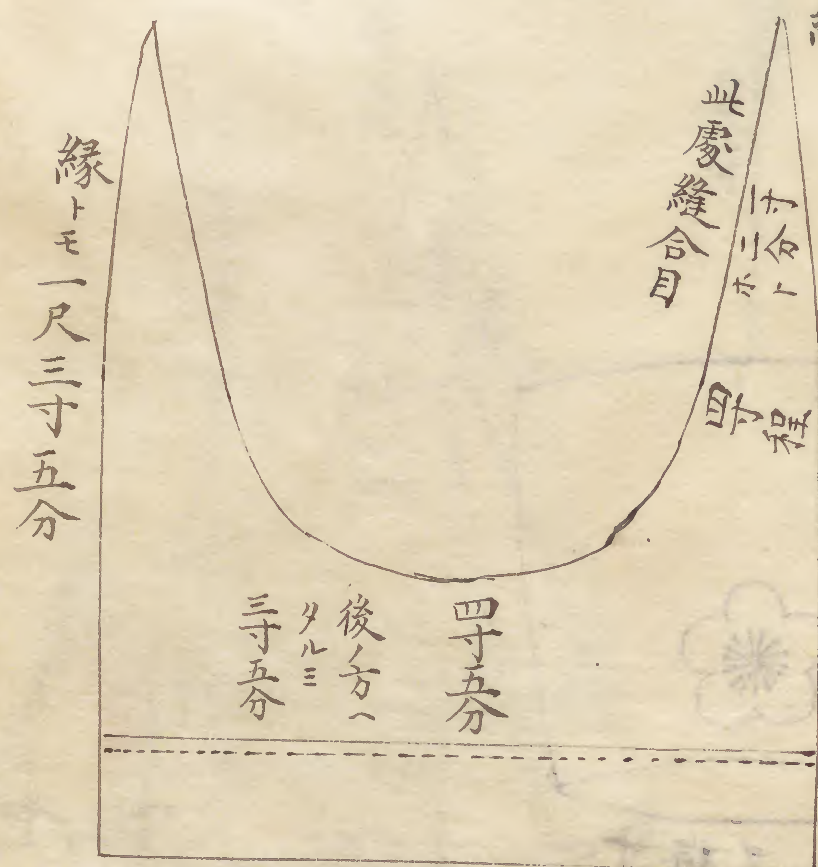
一多分普通品用也

各段之醬素絹直綴杯着用不成故に袂羅機紗之
類より褊小之短衣を製直綴の名を著して之
名を訛て十海と云訓を傳て十海と書主製飾褊
綴といふべき物也故に誤増長して又別に編綴
と云ふ物も殊更換少の製賊族之隱逸之者服用以
とあり

一、袴の式、直綴、褊、十海、編綴、とあり
一、袴の式、直綴、褊、十海、編綴、とあり
一、袴の式、直綴、褊、十海、編綴、とあり

燕尾巾

黒紗
縁花田練



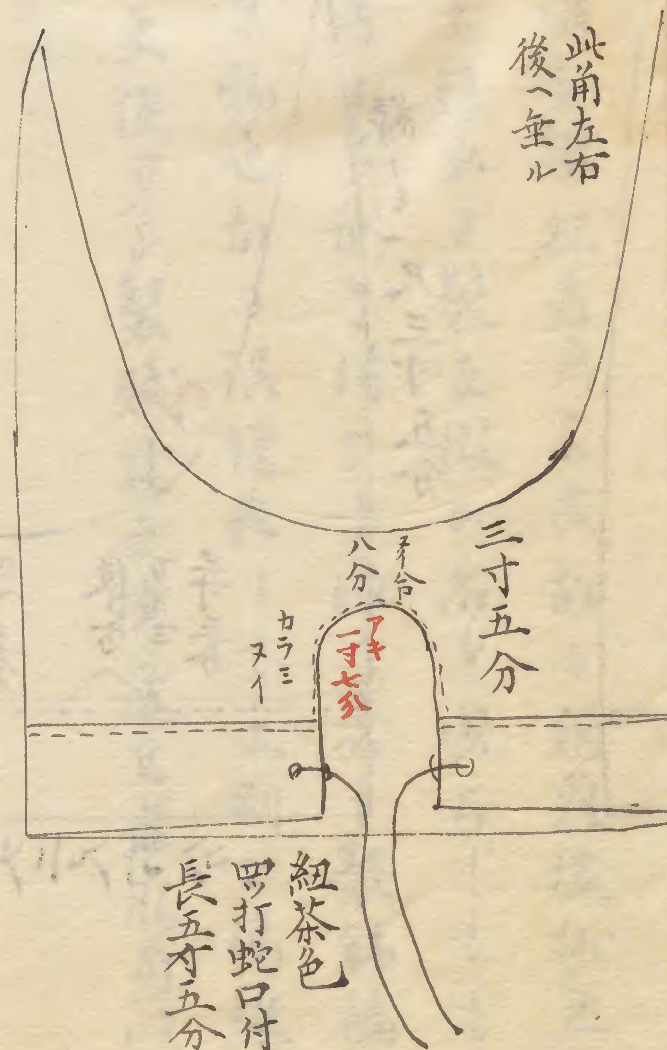
縁ト一尺三寸五分

此處縫合目
時程

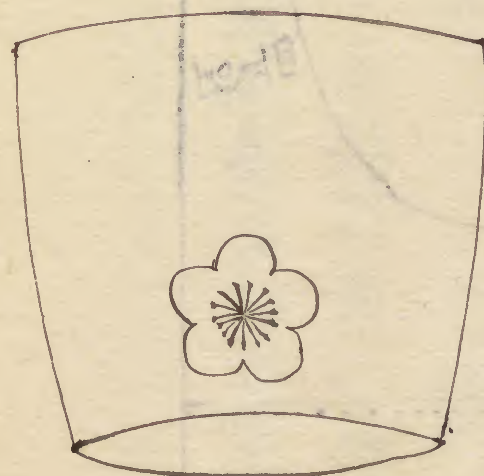
包玉巾 舜水常戴

用皂絹
造之以玉
為飾

此前後左右
後へ垂ル



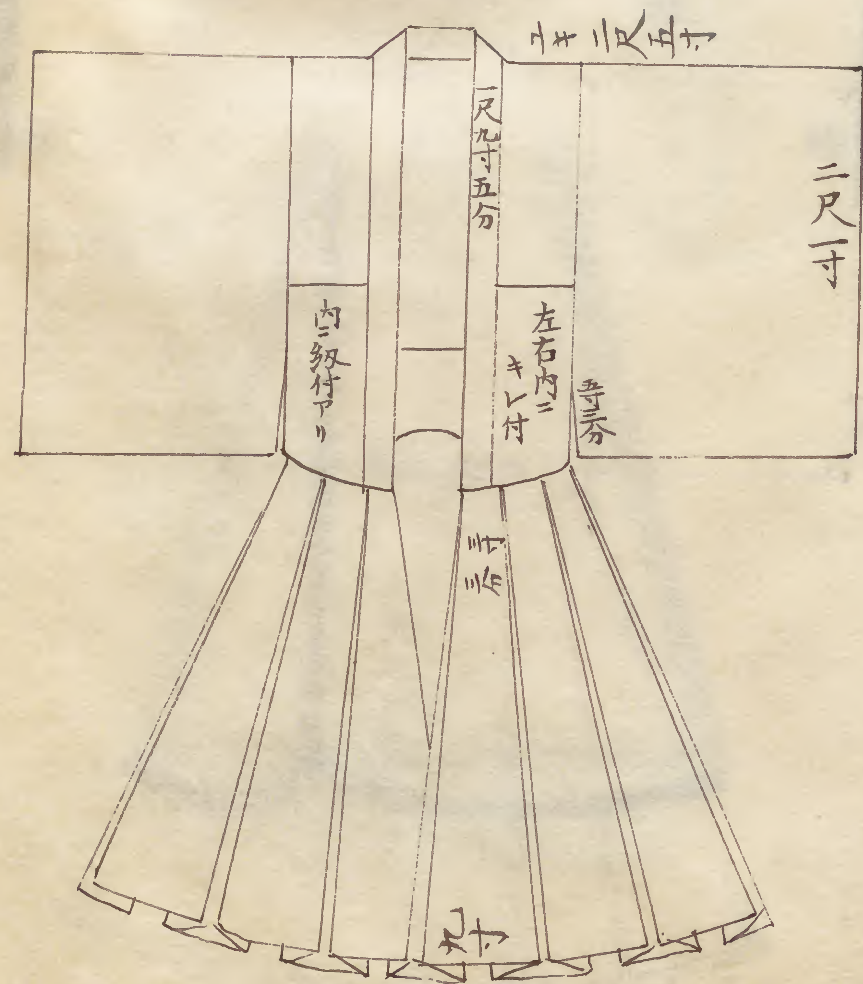
紐茶色
四打蛇口付
長五寸五分程



寸法不定
梅花形玉
以造付之

義公遺制衣道服

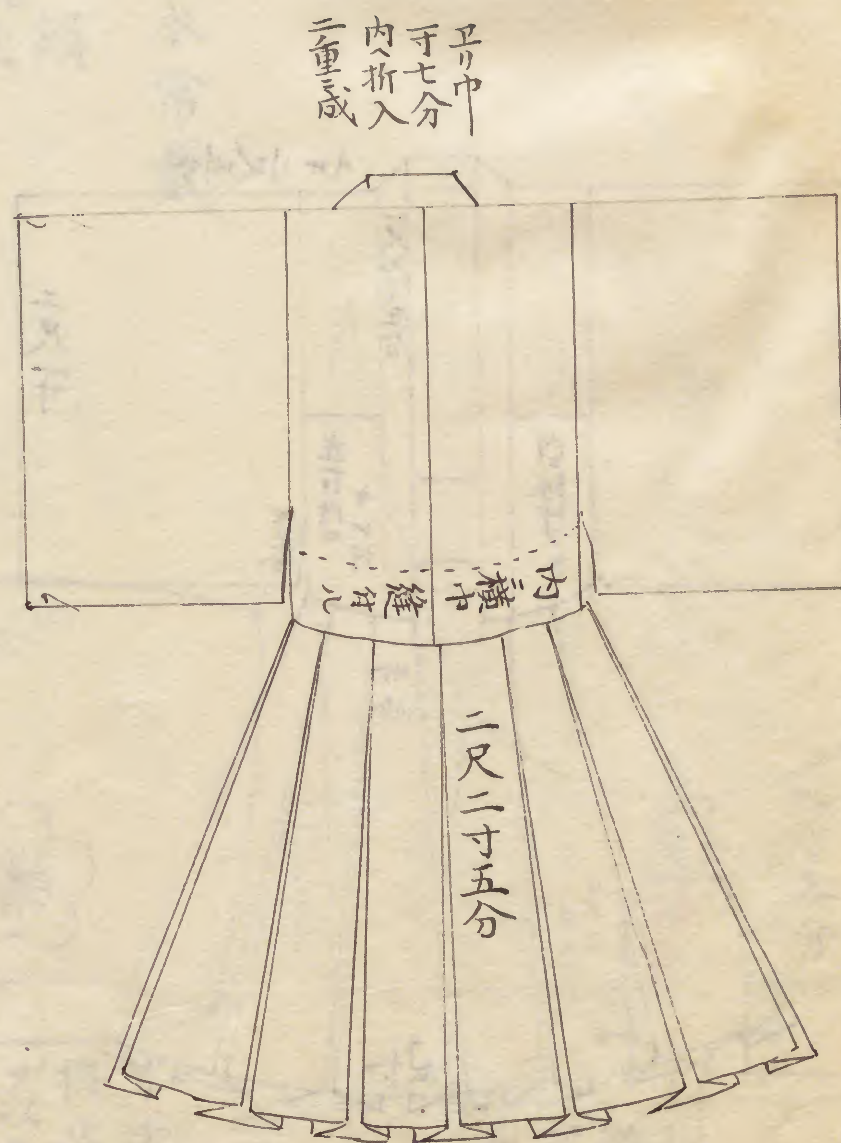
地色紋寄仕意緩微子紗之類主お何れも可なり
寸法不定中人寸より以圖



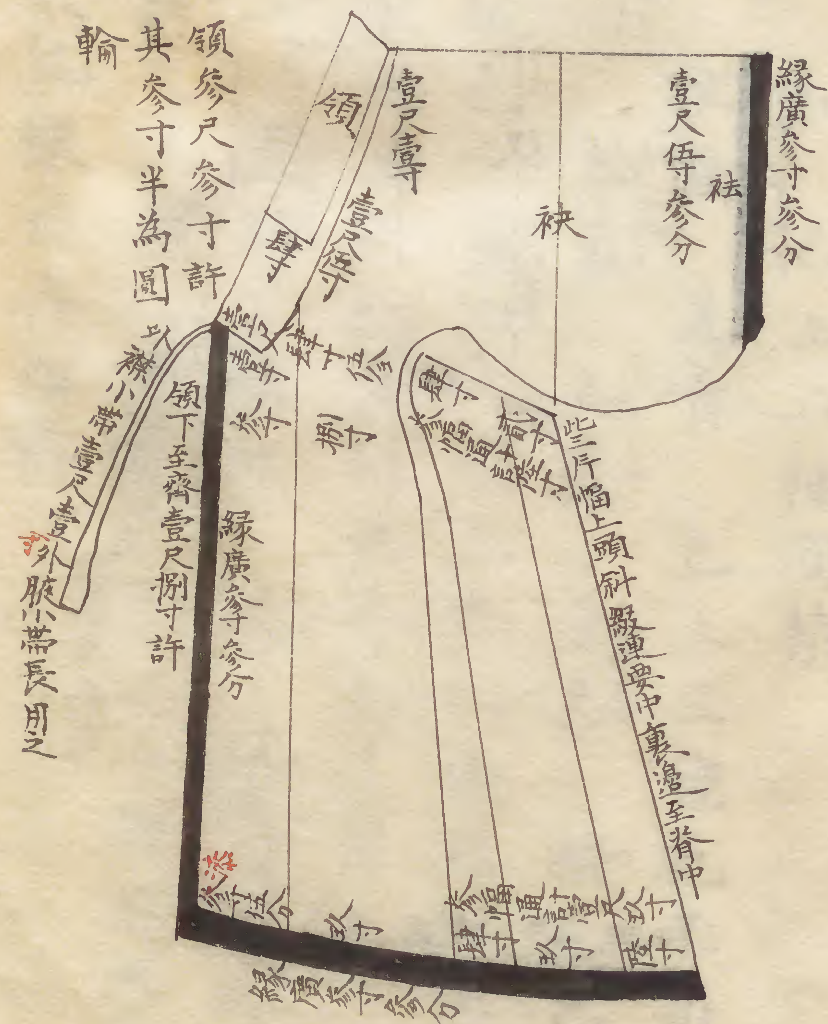
道服前圖



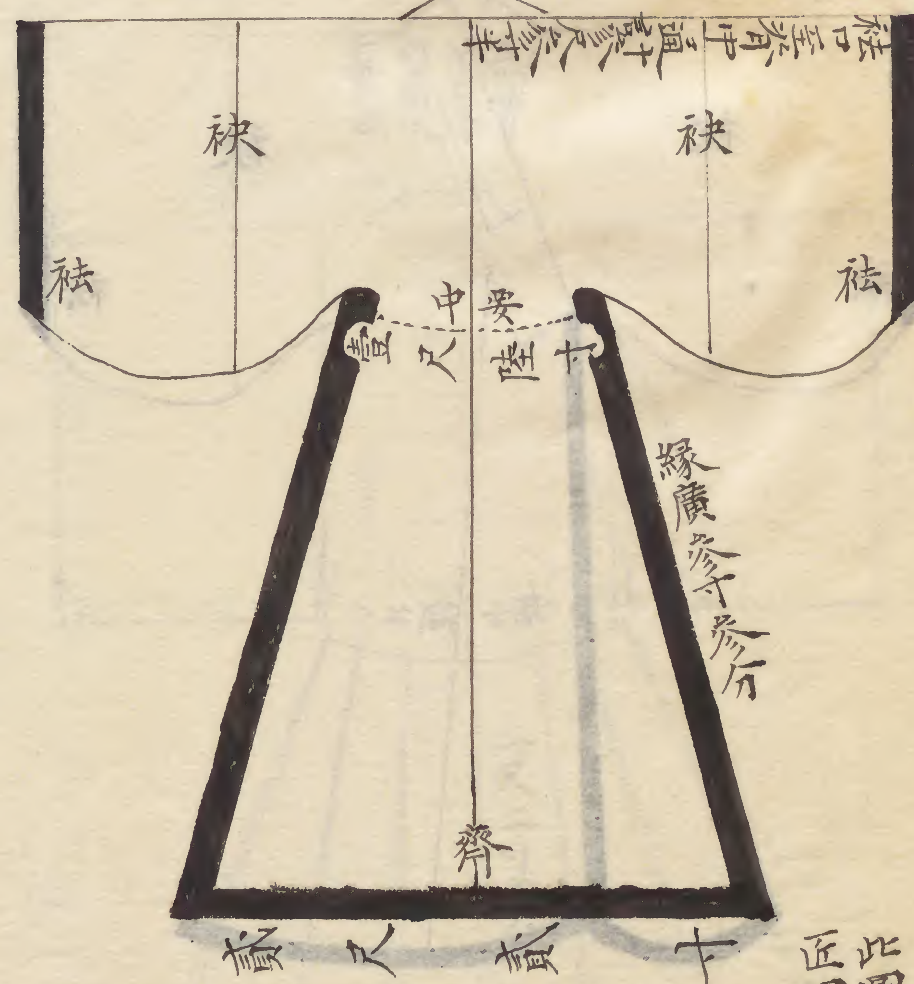
朱氏談綺



外襟式



道服後圖



此圖尺寸用日本水
匠回尺記之

内襟式



道服制

黄 紅 己上二種國禁

黒 玄色 眞青 己上三種色不用

月白 翠藍 天藍 牙色 松花色 醬色

羊絨色 葱白 己上色八種皆可用

鑲邊 必用石青別無化色可用

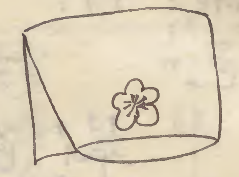
花紬 素紬 綢紗 綾 綾機紬 段子 機紗

漏地紗 秋羅 水緯羅 己上十種皆可做

大凡鑲邊要相稱

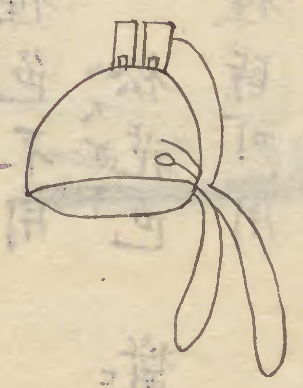
朱舜水曰道服尺寸法度各從其人肥瘦長短而別無定制所謂國禁明家天子服色鑲邊即緣也

包玉巾



用皂絹
造之玉
為飾
朱先生
常戴之

紗帽唐巾



用皂
絹作
之

年山筆記

道服之事

公家方巾て其被指雲着用之時ハ老後とてハ髪
少少有ハ烏帽子亦用ハ之ハ髪ハ少少有ハ之
入道とハ其方巾ハ尤烏帽子亦着ハ之之道服
計又ハ僧のハ衣を着用ハ之又髪を短く
引込メてハ其方巾ハ公家方巾ハ是及不中其心
中ハ其着用其物ハ外ハ承及不中其平生ハ相
織着ハ其方巾ハ
白地其指貫並其地ハ其方巾ハ其樣ハ年比少

成程亦相應、亦確然其中道服ハ紋並色ニ以て定
リ其之物少ク形似白色ナリ而モ蘇芳（紅色）ナリト尤葵
ノ子又ハ牡丹ノ子ナリト其類ノ紋亦多クモ亦
相應可也遊ノ多ク夏ハ紗地ノ類多ク維子綿衣之
類モ心次ナリ色ハ深藍ハ亦差羽二重オモ付ナリ
袴ハ表向着用ノ物也老若ナリナリ段々ノ製法
亦老々道服ハ畢竟老老ニ仁心ある着用ノ物
故急度色目ノ所法無之トナリ是ナリ
至二月迄
何ナリナリ
道服ハ亦所服ナリ心安人ト余等モ時々為召有
儀、亦老々、亦下着ハ襦ナリト平絹ナリト白を

壬二月

下着と深物の二不相應と何處の道服と服と
 冬ハ象と綴り夏ハ紗とよめる物と何處の
 かゝる衣類と何處の道服と綴らぬも何處の
 不審なり
 七月十二日
 子安の稿新平紙

七月十二日
多々々々々々々々

冬道帳に地何れも地紋、赤座、紙子を用ひらまへ
色ハ定りずる能老轉に仁加勸修寺大納言殿綿
緋を黒とひ色より深て赤著る号ハ裏ハ不付く又
裏に付くも是中然尤むふひは長く付く能号迄
内衣とて結ぶいと人の外何地よりも著るゝる数

然るに三河唐子又道服の舊記と出る中然と作
 日中上人曰今日近代の記を見たり一應仁二年衆
 議顯之に云々然るに見中一八道服大臣の平服人
 如此計出云々是を以て案し是れに京にて見及
 然に親王様家清花々衆法是を用と云大中御之之
 若用ハ又祖内大臣ニ改人々若用云々云々
 法住云々云々云々誰も彼も若るハ其
 理云々云々云々七月十三

指也々々下袴々々中隈々々先祖通方卿作之飭抄指
要之々條々々云々下袴者老々人白下袴杖年用

紅下袴如此見中、此今ハ白袴計、
赤の下袴、
幸着、人ハ着て見、
中、七月十三

冬之味道服ハ地ハ何を用ル我裏も付中其知地ハ
何を用ル我里も付中其知地ハ

重き穉身、色々、堅く服々の地の河を以て地紋と爲す
紙を用ひ、老練之人編細し、黒と白の色を染め
着せしむるを見ゆ、色は定りず、人々の好みより
多し、中々裏に不付や、袖の古きものを縫ひたり
又糸にて綴じたり、早急なる其の度、成然
と着能ふ為に見ゆ、尤長きもの不付中、故

内底よりくつゝとくその利何あり物数多し
昔のころお見えへ申す道服の舊記等に見え
不中然るべく彼見え及分右之通ニ法多き少
し時よりさき合ふはさきあふは道服より下
指多し下之袴めきき方にも法多し下袴ハ白き
すゝゝ法多し常の長袴程長く法多し道服に
対ハ必烏帽子小服指末廣あり法多し
此法道服ハ義の極被知付唐々志と色服
とを法取合は立知仰付る日本に道服と遠可
有る日本に道服といふとく遠中法段並日本

之道服ははな様委被仰上様と被知出、則
法道服懸法目法批判あり法多し八月九日新平
深衣法取合は法道服拜見は法日本に道服ハ加
様は腰よりくつゝとく法多し一様きく物あり
法多し何は儀も法多し帯は法多し通りの物あり
法多しはき下けては法道服に通るに付る迄
にて法多し京中初より法多し時分是法多し法多し
法多し凡所の老人相縁を看は法多し法多し
法多し法多し法多し法多し法多し法多し

操觚餘言曰屠隆考槃餘事曰道服製如中衣以白
布為之四邊延以緇色布或用茶褐為袍緣以皂布
有玉衣鋪地儼如月形穿起則披風以呂公黃綠緇
之中空者副二者用以坐禪策蹇驢灞橋雪見策蹇驢灞橋雪見
少皜翁家藏集書畫譜引曰范文正公為同年評書記作
道服贊道服之制不可考許亡為此其意蕭然物外
非不減之服也不然文正公豈率易為人下筆者哉

肥田和泉道服各珠塵アリ見合ベシ
遠碧軒隨筆十德ノ一消閒錄十一アリ

一、^いてあそび結ひ生也十流子紋を付る事も
 あり今も京都にて門跡方のうゝさの若衆も若
 ふ江戸より將軍家へ法興うま者由も今世醫
 者の著きふも同く裁縫あるても羅精好ふとて
 縫ひ色よく装束ありて胸紐の革を用ひに十
 流と同くまたにて平くけりて裾ぐして結ひ
 帯をききしともあら若くは所名のやうなみ
 めきしも実ハ同一物あり今ハ俗人の若々する
 事なりたゞうゝ流れ著るまじりあり

其後より先人武然得たり
 多し其付見出たり
 入法鏡中

[illegible]

十位 帝 子 弟 十位 有 子 弟 十位

十徳の身柄宜しき著し
位なり身柄宜しき著し

伊勢守徳家と説く袴あり十徳の身柄なり
しきを著し十徳の身柄なり由なり武家と
説めて京人の説く遠近様なり

放十徳の身柄なり武家京人も同様
は中流伊勢流必京家と東山時代存あり
なり著し趣なり

先年宮家訪及西池主なり人々説承る十徳
は貴位平人之著用あり下は袴なり

楊法眼は袴なり京人法印法眼
は袴著し著しと見下

而池主水説貴位平人あり下袴著用あり
のの著し是迄長袴著用以上之身柄あり用い

以下平人の用いなり宣趣は楊法眼は平
絹の長袴著用なり有候なり袴著用なり併五
位以上は十徳も不用直殿は用いなり素襦以上

長袴用いなり以下は書付通りなり
江戸ありは醫者有候の人必長袴著用なり貴位の
醫者ハ袴ありは中流なり江戸ハ醫者貴位ハ袴

燕尾

漢書江充傳衣紗縠禪衣曲裾後垂交輸張晏曰曲裾者如婦人衣也如淳曰交輸割正幅使一頭狹若燕尾垂之兩旁見於後是禮深衣續衽鉤邊賈逵謂之衣走

年山筆記

尾 当世以家方以暑用之儀初宗と
是乃中々之條家之形録に唐帽と
と云ふ、燕尾ハ其方の准據に
なり可なり

三條家之
所録子唐帽子

素絹子後
水之

とて、燕尾の如きの准據を
お事り可なり哉

常陸風土記曰久慈郡助川驛家音号遇鹿古老曰倭武天皇至於此時皇后參遇因名矣至宰人米大夫之時為河取鮭改名助注俗語謂鮭祖為須介秀按

檜垣兵庫家文書

正六位上行下統權介平朝臣經繁申寄進私領地壹處事

在下統國相馬下布施鄉者

限東
限西
蛟廻

馬

并境
東

限

南

志子
限北

小多
阿谷

高并
并手

衣下
河水

流海

右件地經繁之相傳私地也進退領掌敢無他妨爰

為募神威任傍例永所寄進於伊勢皇太神宮如件
但權祢宜荒木田神主延明為口入神主於供祭物
者每年以田畠地利上分并土產鮭亦可令備進至
于下司之職者以經繁之子孫無相違^道可令相傳也
仍勤事狀以解

大治五年六月十一日 正六位上行下總權介平朝臣經繁

又 謹解 申永起請進御厨供祭物事

總國管相馬卿者

右件地彼國權介平經繁私地也而以權祢宜荒木

田神主延明為口入神主所寄進當宮也具起請云
任開作田數每年之勤田収別米壹斗伍升畠収別
伍升其外于鵝侶烏塩曳鮭佰尺可^{秀按疑料之訛}進也者然則
件濟物之内相分半分定供祭新當時一祢宜元親
神主迄至御子孫之時永可沙汰進也仍為後日注
事狀以解

大治五年八月廿二日 權祢宜荒木田神主

家忠日記曰天正十年九月廿九日初鮭城子以事

家忠

常陸國志曰鮭和訓左今東海及那珂河久慈河皆
出那珂河出者最美聞於天下世所謂湊鮭也考本
草綱目有鯪魚狀相似

雞林唱和集稻若水間此魚我邦名鮭生東北海中

常以八九月来自海洋溯流而上產子鹹淡水交會

之處秀按此言非也春初復化為魚苗仍入鹹水中狀略似

香魚而極大長三四尺鱗細有斑文皮厚肉赤肉中

無細刺味美腹中子大如豆紅潔似珠顆攢簇如

玉蜀黍形味亦美蝦夷國此魚尤多熏乾貨于四方

按閩書云過臘魚頭類鯽身類鯪又類鯉肉微紅味

美尾端有肉口中牙如鋸好食蚶蚌臘來春去故

名過臘觀所說形狀差近鮭也第鮭東北海有之八

九月由海而入江不當在南方閩海中似鮭與過臘

非一物也然魚在海中遷徙無常或有猶如鴻雁春

去秋來者安知此魚遇秋風起自東北來圖南日就

暖故在我邦則八九月盛有而及至臘月閩海始有

之也秀按此說非也近江州琵琶湖有此魚較於生海者形

小鱗白亦八九月自湖入溪澗水流處名之江鮭鮭我

邦村上天皇時有源順者著倭名類聚鈔二十卷

其中載鮭引崔禹錫食經云鮭其子以葢赤光一名

年魚春生冬死故名食經不傳于世其詳不可得而考也不知貴國有此魚也其所名奈何辱教之幸矣李東郭答此魚我國松魚嶺之東南多有之不甚貴也
洪鏡湖答此魚絕似我國鱸魚未知貴邦亦有鱸魚而不與此同耶若非鱸則非僕所可知也
嚴龍湖答我國東海亦多有此魚其名松魚也
南泛叟答此魚是我國松魚也與鯉性同而體小我國東海所產七八月之間自海作隊游上川溪或磨身於石鱗脫不止至身斃未知其性也

辛卯抄冬初四日朝鮮國信使還來平安館次日余偕青禮幹氏往訪製述官三書記余將鮓魚及條子乾鮓問之李重叔洪命九嚴子鼎南仲容其具所答見上按東醫寶鑑曰松魚性平味甘無毒味極珍肉肥色赤而鮮明如松節故名為松魚生東北海中今以南仲容所答參之寶鑑說明是鮓與松魚一物也然其名為松魚亦自是東韓方言而非華人所稱者也
八閩通志閩書興化府志漳州府志福州府志汀州府誌海澄縣志等書俱載松魚所著形象與此大異也殊類而同名爾以棘鱗魚為道美魚烟草為南雪

艸類皆是彼中方言非正名也

正德元年十二月十日白雪道人書

碎玉話三卷曰謙信越後ノ土物蠟燭金引鮭ノ鹽引

黃檗ナトノ商人ヲ作リテ國々ニヤリ人情地形

ヲ窺シム

平維章不問語曰鮭ノ楚割ハ鮓也素乾

とのあり古へ越後より常貢ありしと云ふ

要略に見へる

曾占春魚品曰鮭魚

順鈔鮭和名左計按鮭說文魚

作鮭也和名鈔引崔氏食經云鮭其子似菰赤光一

名年魚春生年中死故名之屠本畧海錯疏云過臘

頭類鯽身類鮓又類鯉肉微紅味美尾端有肉口中

有牙如鋸好食蚌蚌臘來春去故名過臘顧岭海槎

錄云紅魚狀如松江之鱸身赤色亦間有白色鮭按

春雪融流則其肉必產於鹹淡交會之處土人家以

其肉細膩初為膾烹之乃有味皮厚如錢此品不但

勝海鄉雖江左時魚鱸鮓之味亦無以尚也意所云

或以爲棘
鬣魚否

江魚殆甦魚之狀也又乾隆樂善堂

集有楮鱸其鮓魚乎斯方奧羽產鮓於前及蝦夷東

西兩部尤為饒衍始生於淡而下於鹹又升於淡云

東奧及彝中產通商四方無闔國不到矣閔氏風土

記云蝦夷第一產物松前亦有扁形濶腹大口細鱗

生河海之間七八月上川水西部石磧川最多比

年商人所承買巨舶十二艘每十艘載五萬枚以上

重比米千石租金額千八百兩矣其餘夷人終年口

食不可為量數也東部你失斃贊亦多嘗一細漢

千五百枚云其魚多去腸為醃魚又俗云和口我邦所

俗云秋味
又云塩引

我邦所

用皆出夷中或削肉洗乾為脯牛俗或去骨風戾於

科俗
魁云

或去骨風戾於

雪中

夷呼云
阿達賞

其子赤色如南燭子凝或片者俗云離

俗云
笛子離

為粒者

俗
云
子癸

亦皆佳于鹽藏源公君美云徃朝鮮信

使時或問朱甦魚於彼國人曰我國鱣也

鰓鰻鰓鰻
鰓鰓鰻鰻
鰓鰓鰻鰻
鰓鰓鰻鰻

美卵如真珠而微紅味尤美
許俊所記豈其鮓魚歟

縹若水復問

盤意朝鮮聘使之言多係其國方言亦唯或有不

不為不知者

北越雪譜曰新撰字鏡魚の部に鮠ササギとあり和名ササギ本

字ハ魁の字を同するハ誤ニシテ之ヲミヤヒハ魁の字を用ひ

下也
古事
同書子崔爲錫
會經造
子大
魁其子
每小
似之
亦

味噌

東雅曰味噌ニソ倭名抄に揚氏浮語抄を引て云藤將
はミソと按辨字彙の注に但本義未詳何ぞ味噌の二字
を同く味噌作末通倭文に末榆茨醬何れ末は搗末義也志
多末を記して末を辨て味噌なるを以て今以後のじ
を記するも一もなり水に搗て薄語を辨るも成るもの
れをよき藤將を呼ぶミソといひ^ハゆ是も藤將方^云
よりれりや藤將事よ按るに醬同密^{ミソ}と云へるに
宋世孫穆^{宋世孫穆}
お藤將^{藤將}は^ハ新羅の別名^ハも^ハ彼等の製する^ハ倭い^ハ末^ハ水^ハ
して^ハ地^ハを^ハよ^ハする^ハ
ふ^ハ水^ハは^ハ名^ハを^ハも^ハ彼^ハ方^ハ言^ハれ^ハま^ハに^ハ呼^ハひ^ハき^ハる^ハ也^ハ日^ハ本^ハ家^ハ語^ハよ

七まゝ我國にて將者は
 孫河と云ふを云ふ
 即ち之を
 是を提ひ人の名
 今此とも
 即解の將者を呼ぶ
 是を我
 法をひらき
 云ふ

味のとも也といふ也末の字は本朝令よりあるものなり
 は即ち我國の方言也といふに改め撫ふ一は敬也といふなり
 水にまきほよすといふことありまきは煮るなり
 北窓瑣言曰味噌汁は甚だ味の物あり唐土よりあるといふ
 日本も徳仁の詔より味噌もやろんといふの内而味噌は漢式といふ
 味噌汁をいひらるるものなり汁といふは味噌の供え食ふ
 もろもろのい草よりせよとのひの如くともす食するものなり
 味の字古く味ねるとして上の畫を長く末の字子に改むといふなり

後世味の字は誤ひてと由緒可成意志摩守物語

程朱城を渡る如く、壬午年より壬子年は彼親に諫るゝも
や年若くして大海を越て日本の高きをして知るべしと云ふは
二三年隠居して有りし又壬午年あるといふと云ふは第一口
本の飯を馴しは彼國の飯を食へりて第二酒第三味噌汁
あく香の物を多く食ふ日用のものは赤城甘菜の類を年々
馴れぬに隠居しては日本の米味噌も好むが爲に食へりて味は
老を多しの憎みなりてたゞ日用の類は後所にて一年半年の食
物を携へりて用ふるも人目も立たずけしは死人を救ふ道

つゝとて誠子未味醬考の物日用の物ありと叙ふは頗長
也人々もよきものなり

南畝著言曰天聖信系隆庵曰々の世味噌の事多し
つゝ以或未味醬と云く末教計の謂に按宋孫穆雞林考
方之曰將曰密祖と云く似る案の事を用ゐる又僧道本
蕭鳴卓云崎陽寄故園諸君子詩云不辨殊方語山
童在^{指揮}那知鄉思瘦但說味噌肥^{風俗以豆豉之}
肥力疾酬人事孤吟羨鳥飛悲哉秋瑟長憶舊柴
扉又云言と云古板お味噌のかり名を東坡とつけ
やうのやうなひとくは案によき種といふれり

尾櫟雜考曰味噌と云代實錄四十九卷味噌二合と云ふ事
延喜式神名帳^{五卷}齋宮寮正月云廊^科科の條味噌一斗云
と云ふ事 和名妙高鹿醬美蘇と云 俗用味噌二字味
宜作^末何則通俗文有末榆莢醬末者搗末之義也
と云 或東雅と云 略文
雞林考事の中云蓋曰蓋 音渴

なとあるものもよきものなり 言なるも誤り
かきかく音注もよきものなり 白米曰漢菩薩といふ
蓋刷^{ヨリ}曰養又といふものなり 通一考云よき
味噌と云ふ事 多しと云ふかの密裨といふ事と
音の記も多し 知るべき 將も種の方あり味噌もそれ

日本邦へ来ては味噌汁を喫する者も獨多し及す味噌の効を稱揚するも色彼土の味噌より長崎へ来る唐人が日本人を食しと云ふ事も彼地へ漂流せるもの居るを味噌を好むより大に富むると云話をも聞かん其より味噌の味も美なり其味もあまじ人か

寶曆元年福建漂流記曰食る飯茶酒酢醬油六月本を通る味噌の味もいふ
寛永廿年韃靼漂流記曰小島にて有る物米味噌塩外は麴乾餅乾酒肴味噌塩等あり○料理味噌を煮るに味噌を煮るに

本朝食鑑曰味噌釋名高麗醬楊氏漢語抄末醬和名○源順曰

美蘓今按辨色立成說同但本義未詳俱用味噌二字味宜作末者擣末之義也而末訛為末末轉為味蓋有志賀未醬飛彈未醬各以其所出為名也必大按近世傳誤以用味噌則暫相從而不改正之

集解味噌者本邦每日所用之汁也用黃白大豆而

造之其法用好大豆最肥大者浸水一夜取出煮熟要不取其豆之粘汁若取則味不美粘汁俗稱豆飴惟釜中可煮乾爾待其豆之煮熟變作赤黃而搗臼者數千杵令如泥攤于板上令略乾夏月乾之半日冬月不可乾之別用精白米麴好白鹽拌勻以揉合

于豆泥再搗臼中亦數千杵取出收藏木桶經二三十日而成此法有上中下之三品大抵以麴多為上用好肥大豆一斗精白米麴一斗五六升或七八升白鹽二升餘而合造者上品也經數月而易敗不能經年欲經年收貯者倍鹽則不敗若敗而生酸味者用牛房根去黑皮入于味噌中則佳然甚敗者不能收之也中品者用好大豆一斗精白米麴一斗餘白鹽二升餘而合造此可經年收貯也其下品者麴亦白而少亦經年而好者也大家之廚悉上品造而夏月一兩月間造冬月四五月間造新舊相逐而用之

其中下者一家侍僕之用士商之家隨其貧富而造用之也有玉味噌者煮豆半熟而以庖刀打碎令麴細合之麴少鹽多揉合為丸令打鞠大裹之以稻草用繩縛定繫之簷間經年用之此亦下品或用大豆煮熟交麴鹽合米糠而造成此最下品其下品者以經年能保不敗為好也有白味噌者用白大豆肥大者浸水煮熟去外薄皮杵搗成泥一斗精米白麴一斗七八升白鹽二合許搗合充桶繫封二十餘日而成其味雖太甘而不為美亦不可人惟愛新奇經日必易敗若用之者合舊味噌則佳此常嗜鹽梅之家

